

13. 当教室における咬合に異常が見られた患者の実態調査

○伊藤 桂子, 広田 和子,
野中 和明, 中田 稔
(九大・歯・小児)

従来乳歯ウ蝕は咬合発育上の大きな障害因子の1つであったが、1歳6ヶ月児や3歳児の歯科検診制度の普及、歯科医の増加や母親の関心度の向上などもあいまって、ウ蝕罹患性の低減化が見られるようになってきた。このような状況の中で社会の関心は、成長期の小児にあっては、歯列や咬合あるいは咀嚼機能の健全な発育という面に注目していくことであろう。これは、小児の歯科医療の本来の目的が、咬合の発育を正常に導き健全な永久歯咬合を完成させる点にあることと合致するものであり、今後の我々の努力はこれらの期待にこたえるためにも、咬合の育成ということに振り向けていくことになるであろう。

そこで今後、咬合育成をより円滑かつ効率よく行なう上での参考に供するため、当教室において過去5年間で、咬み合わせを主訴として来院した患児及び当科外来で咬み合わせの異常を発見された患児らについての実態調査を行なってみた。

その結果は、

(1)主訴を有する患児の割合：約20%

主訴を有しない患児の割合：約6%

(2)男女の比率 男：女 約45%：約55%

また、今回は特に乳歯列期の反対咬合の患児について、主訴を有する群と有さない群との間で形態学的相違の有無を調査し、その治療に際してどのような種類の装置を用いたかについて検討してみたので、報告したいと思う。